

マダガスカル研究懇談会ニュースレター

# SERASERA52

2025.3.21発行



表紙の写真

## アオメイロメガエル *Boophis viridis*

マダガスカルはカエルの種数が非常に多いことでも知られ、2024年時点で400種以上が記録されています。このうち100種以上はこの10年で新たに記載された種で、これからも多くの新種が記載されていくと予想されています。特にカエルの多様性が高いのは、湿潤な東部の熱帯降雨林です。100Ar紙幣にも登場するアデガエルの仲間や、鮮やかな目をしたイロメガエルの仲間など、色彩も形態も多様なカエルたちの楽園となっています。

撮影年：2019年

撮影場所：アンダシベ (Andasibe)

撮影者：福山亮部

## 目次

表紙の写真 アオメイロメガエル <i>Boophis viridis</i> .....	1
生きもの図鑑 31 リゴズム・マダガスカリエンセ .....	3
Moi et Madagascar vol.31 .....	6
Voandalana (土産話) 43 ツァブラハ .....	7
初めてマダガスカルを訪れるバードウォッチャーの旅行記 .....	13
調査ノート：マダガスカル東部アンダシベ地域の様相－熱帯林と人々の暮らし .....	24
マダガスカル研究懇談会会則 .....	31
第28回懇談会（大会）のご案内 .....	36
原稿を募集しています .....	38
2024年度世話役・事務局・編集部・会計監事 .....	40
奥付 .....	40

# リゴズム・マダガスカリエンセ

橋詰二三夫 ((一財) 進化生物学研究所)

## 【和名】

リゴズム・マダガスカリエンセ (学名の英語読みを、カタカナ表記したもの)

## 【学名】

*Rhigozum madagascariense* (ノウゼンカズラ科リゴズム属)

## 【現地名】

Hazontaha : Amboasary 地域、Ampanihy 地域、Toliara 地域

Amboasary 周辺での聞き取りでは、本来は hazontana ないし hazontagna の表記で、hazo 「木」、tagna 「カメレオン」から、「カメレオンの木」の意味であるとの話があった。

## 【分布】

Ihosy より南側 (Andohahela より西側) から南西部 (Toliara 地域) に広く分布する。森林ギャップや道際など日当たりのよい開けた場所で生育する (図 1)。

## 【形態的特徴】

高さ 3-5 m 程度の木本性植物。(図 1) 幹は太くても 3-5 cm、葉は幅 5 mm ほど楕円形。花は 2 cm 台の合弁花で枝先に密生する。花卉、雄しべは 5 数性、雌しべ 1 本。花色は黄色 (株により濃淡に差がある) (図 2)。開花期は 9 月~12 月。

## 【その他】

*Rhigozum* 属はアフリカ圏の乾燥地を中心に 7 種が知られ、マダガスカル固有種として本種がある。写真は 2002 年 11 月 20 日に Amboasary 地域の Ranomainty 村周辺の道沿いで撮影したものである (図 3)。枝葉を煎じて、嘔吐止めとして利用する (湯浅ほか 2000)。また大きく成長した主幹を薪炭材として利用する。

また日本での栽培では剪定に強く、地上部をほぼ切ってしまうと地下部から再生することが観察されている。

## 文献

湯浅浩史・阿部主計・RAKOTOZAFY Armand・ANDRIAMAHERRY Rivo Robinson (2000) マダガスカル島アンタンドロイ族の薬用植物、(財) 進化生物学研究所研究報告 9: 219-246.





図 1. リゴズム・マダガスカリエンセの全景



図 2. リゴズム・マダガスカリエンセの花



図 3. リゴズム・マダガスカリエンセの分布景観。

日当たりのよい場所で、道路沿いなど二次林のような場所でも見ることができる。



# Moi et Madagascar vol.31

私とマダガスカル

絵・文  
元青年海外協力隊  
マダガスカル隊員石田



私は青年海外協力隊として、アンチラベ (Antsirabe 首都の Antananarivo から南西に約 170km) の FOFAMA 聾啞学校に配属されていました。そこは全国から集まった耳の聞こえない子供達の全寮制の学校で、5歳くらいから20歳前後の若者が共同生活を送っています。私も学校の敷地内にある家に住んでいました。

私の担当は洋裁学科のクラスでした。教室で生徒達に会った初日に、クラス全員で私の手話の名前を考えてくれました。マダガスカルの手話では、人の名前はジェスチャーで表します。例えば、テレーザはお団子の髪型をしているので、頭の上に握った手を乗せる動作。ローズは花が開く動作が名前でした。私はピアスを着けていたので、耳たぶを揺らす動作が、私の名前になりました。

手話の名前の使い方はというと、名前のジェスチャーをし、「どこ」という手話 (手のひらを上に向けて、指を動かす動作) をすると、名前の人を探している事になります。

私は聾啞の人達との生活は初めてでしたが、子供達はとても勤が良く、何を言っているのか口も読んでくれますし、すぐにわかり合う事が出来ました。彼女たちはすごい集中力を持っており、洋裁や刺繍や編み物といった手仕事を教えると、あっという間に上達しました。

彼女たちとの2年間で、私もまた手話やマダガスカルの刺繍など、多くの事を学びました。手話は世界各国で異なるという事も、ここに来て初めて知った事でした。

## ツァブラハ

堀内 孝（写真家）

マダガスカル北東部にある町、マルアンツェチャ Maroantsetra。雨が多くてアクセスには苦勞するが、食べ物がおいしく、人は穏やかで、ゆったりとくつろげる町だ。1998年11月、この町に住むベツィミサラカ Betsimisaraka 人の友人エリックの案内で、郊外にあるアンヂャヌフーツィ Andranofotsy 村を訪ねた。1キロメートルほど離れた海岸からは深い緑に包まれたマスアラ Masoara 半島が一望でき、正面に鯨のような形をした島ヌシ・マンガベ Nosy Mangabe が見渡せる風光明媚な村である。

海岸の後背地に目をやると、墓地が広がっていた。コンクリートや木でできた棺のような形の墓が並んでいる。エリックによると、コンクリート製の墓は本埋葬墓。20～30年前まではほとんどが木製だったが、最近はコンクリートで作る人が多いという。点在する木製の墓は、「亡くなった人を一時的に納める仮埋葬墓です」とエリック。詳しく聞いてみると、この地域に住むベツィミサラカの人びとは、人が亡くなるといったん仮埋葬墓に納めて遺体が骨になるのを待ち、数年後にツァブラハ Taboraha と呼ばれる祝いごと（ここでは改葬祭を意味する）を行って本埋葬を行うのだという。



マルアンツェチャの郊外で見つけたベツィミサラカ人の木製の墓

翌年4月、ヌシ・マンガベでアイアイの撮影をしようと思い、再びこの町を訪ねた。島に数日滞在したにもかかわらず全く撮影できずに帰ってくると、ホテルの従業員が今日と明日、ツァブラハがあ



るとの情報を教えてくれた。この祭りの時期は7~9月が多く、今頃行われるのはめずらしいらしい。アイアイの写真が撮れず落ち込んでいただけに、これはうれしい知らせだ。プログラムを聞くと、金曜日の今晚は歌とダンスで、土曜日の明日に改葬が行われるという。早めに夕食を済ませ、会場を訪ねてみることにした。

町外れにある会場は、祭りのためにやって来た親族や周辺から集まった若者たちでごった返していた。色鮮やかなランバフアンニ *lambahoany* を腰に巻き、着飾った女性たちが目立つ。皆、東海岸の祭りでは欠かせないベツァベツァ *betsabetsa* (サトウキビを発酵させて作った酒) を飲みながら、大音量の音楽に乗ってダンスを楽しんでいる。

やがて二人の女性が向かい合い、ダンスバトルが始まった。周囲から二人を鼓舞するかのよう激しい手拍子と歓声が上がる。その様子を撮影しようとする、「写真は嫌い。撮らないで!」と踊っていた女性に遮られてしまった。見ず知らずの外国人が、許可も取らずにカメラを向けたことが気に障ったらしい。今回は時間がなく、祭りの主催者に許可を取らずに来てしまったが、やはりきちんと話を通しておくべきだったようだ。とりあえず、見る分には問題なさそうだったので、ベツィミサラカ人の伝統的な音楽と多様なダンスを夜半近くまで楽しみ、ホテルに戻った。その後、すぐに雨が降り始めたが、熱気に包まれた歌とダンスは夜通し続いたという。



掘り出された遺骨を新しい白布で包む親族の男性たち。後方に見える建物は彼らの墓

翌朝、雨が上がるのを待って会場へ向かった。今日は、昨夜の一件のこともあるので、ホテルのオーナーの息子のパトリックに同行を頼んだ。8時過ぎに会場に着くと、彼に主催者の家族を紹介してもらい、正式に写真撮影の許可をもらった。

祭りは早朝から始まっていた。司祭であるタンガラメーナ *tangalamena* のスピーチはすでに終わり、

祖先に捧げる牛も屠られたという。

墓地では、5年前に埋葬されたという男性の遺骨が棺から取り出されていた。10人ほどの男性がランバファンニを広げてそのまわりに立ち、作業が見えないように隠している。パトリックによると、これらの作業は、亡くなった人が男性の場合は男性が、女性の場合は女性が行うのが慣わしだという。遺骨を取り出していた男性は、小さな骨まで丁寧に探し出し、きれいに汚れを落として新しい白布の上を集めていた。

全ての遺骨を拾い終わると、男性はそれを白布で大切に包んだ。そして、かたわらで待ち構えていた女性にそっと手渡した。亡くなった男性の妻だという。久しぶりに夫と対面し、懐かしい思い出が蘇ってきたのだろうか。彼女の目から涙があふれている。

最終的に3人の遺骨が仮埋葬した棺から取り出され、集まった親族に次々と手渡されていった。遺骨を手渡す理由について尋ねると、「遺骨に触れると、幸せになれるのです」と親族のひとりが教えてくれた。遺骨が手渡されている間、静寂に包まれた墓地には、女性たちが歌う美しい讚美歌が響いていた。



夫の遺骨を抱きかかえ、涙を浮かべるベツィミサラカ人の女性

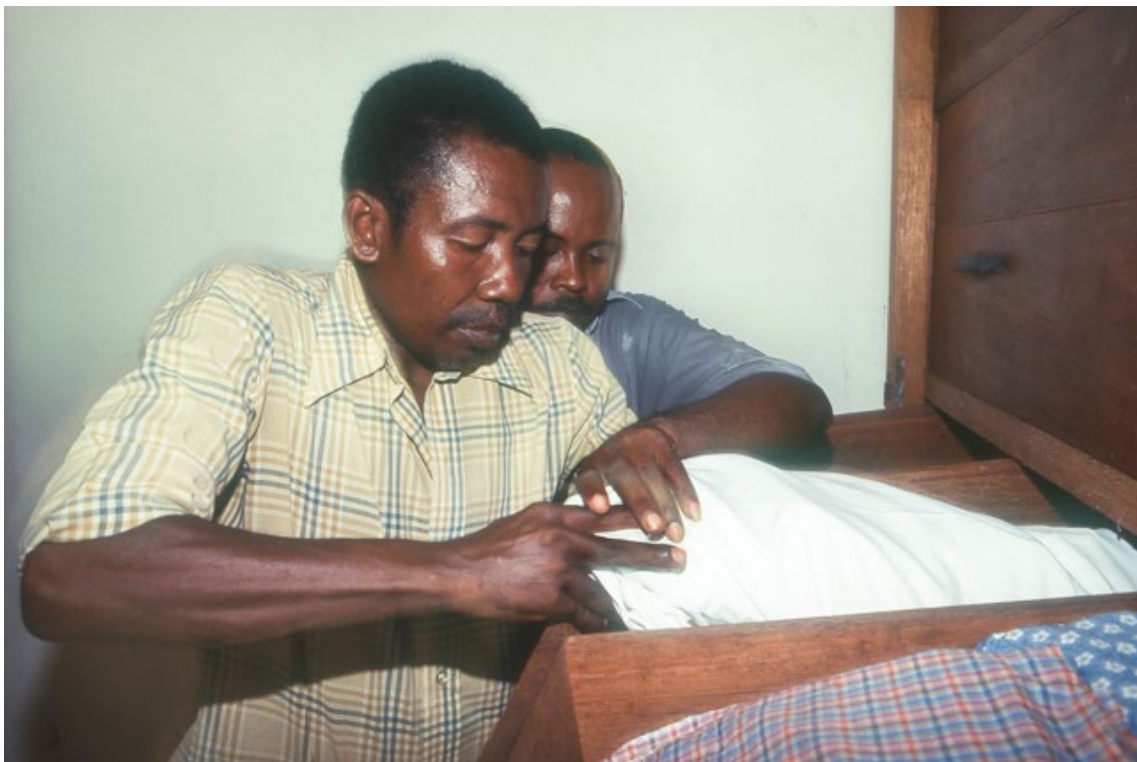
お昼近くになると、コンクリート製の墓の扉が開けられた。郊外で見た小さな棺型の墓とは違う立派な家型の墓だ。古い写真やポストカードを見ると、かつてこの地域には棺の上に木の屋根をかけた大型の墓があったようだが、それがモダンに進化したのだろうか。いずれにしても、今回の祭りを主催した家族は相当裕福らしい。

墓の内部は8~10畳の広さで、入って右側に長さ1メートルほどの棺が積まれていた。反対側の壁一面には、ダンスを思わせる大きな引き出しが並んでいる。親族の男性はその引き出しを開け、三つ



に仕切られた枠の中に白布で包んだ遺骨をひとつひとつ納めていった。そしてその上に、ズボンとシャツ、下着、ランバフアンニを置き、さらに帽子をのせた。それが終わると男性は、遺骨に向かって短い別れを告げて、静かに引き出しを閉めた。今後、この引き出しが再び開けられることはないという。

作業を終えた男性に「なぜ遺骨と一緒に衣服を入れたのですか？」と聞くと、「向こうの世界も、われわれが生きている世界と同じなんだよ」という答えが返って来た。そう言えば、南部に住むマハファリ Mahafaly 人の葬式でも、亡くなった人の家族は死後の世界について同じように語り、トランクに入れた衣類や食事用の皿とスプーンを墓の上に供えていた。マダガスカルでは、民族集団が違って、祖先を思う気持ちはそれほど変わらないのかもしれない。



家型の墓の中に入り、三つの遺骨を大型の引き出しに納める親族の男性

納骨が終わると、招待客を集めて食事となった。広い敷地に屋根のかけられた会食場が設けられ、そこにバナナの葉に盛られたご飯が用意されている。会食場に入りきれなかった人たちは広場に設置された席に腰を下ろした。すべての席が埋まると、バナナの葉の小片とおかずの牛肉が配られ、一斉に食事が始まった。皆、バナナの葉を折ってスプーンを作り、ご飯をすくって食べている。祭りの時の昔ながらの食べ方だという。おかずの牛肉は朝方に屠った3頭分の肉を調理したものだった。

食事が終わると、今度は飲み物が配られた。ビールを始め、コーラやファンタもふんだんに用意されている。大人も子供も思う存分飲みながら、久しぶりに会った親族と和やかに語り合い、お互いの繋がりを深めているようだった。そして小一時間ほど歓談を楽しむと、主催者によるスピーチが行われ、2日間に渡って行われた盛大な祭りは終わった。





ツァブラハでの食事風景。バナナの葉の上にはご飯と牛肉のおかずが用意された

改葬祭と言えば、中央高地に住むメリナ Merina やベツィレウ Betsileo の人びとが行うファマディハナ famadihana は見たことがあった。死者の遺骨を墓から出して新しい絹布で包んで弔う祭りだ。また西海岸のサカラヴァ・メナベ Sakalava Menabe 地方でも、王族が歴代の王の遺骨を新しい絹布で包んで弔うツィリーツイ Tsiritsy という祭りを行っていた。しかし、東海岸に住むベツィミサラカの人たちが、このような大規模な改葬祭を行っていることは全く知らなかった。まるで納骨堂を思わせるユニークな墓もおもしろい。

マダガスカルは、民族集団によって様々な死者の弔い方があり、墓の形もバリエーションに富む。何度訪ねても新しい発見があり、興味の尽きない国である。



郊外の墓にはツァブラハなどで屠られた牛の頭骨が飾られていた

# 初めてマダガスカルを訪れる バードウォッチャーの旅行記

武田彩織・武田信和

私たちは、2024年9月中旬から下旬にかけて、約2週間、主にバードウォッチング、次にキツネザル観察目的でマダガスカルを訪れました。

事前に、マダガスカル研究懇談会の皆様、特に、川又様、深澤様に多々ご指導いただき、とても楽しく旅をすることができました。この旅行記は、マダガスカルに興味があるけれど何から準備をしていいかわからない、地球の歩き方の情報が古すぎるとお嘆きの方に少しでもお役に立てれば、と思い、旅行お役立ち情報と探鳥記録をまとめました。

## 1 事前準備

### (1) ビザ

気付いたときには遅すぎて、事前に国内のマダガスカル大使館でビザを取得することは諦めました。ちなみに大使館の代表電話で聞いたところでは、申請から発給まで最低72時間かかる、とのことですので、郵送申請しようと思うと最低でも出発の1週間前には申請する必要があります。

入国を拒まれたらどうしようと、アンタナナリヴ (Antananarivo) のイヴァト (Ivato) 空港に降り立ちましたが、現地での旅行者用ビザは呆気にとられるほど、合理的で素早かったです (編集部注: 時期、時間、担当者によっては時間がかかることもあります)。

イヴァト空港の国際線ターミナルに到着して入国審査の部屋に入ると、居住者用と非居住者用の列が分かれています。非居住者用の列に並び、入国審査官のカウンター (10~20 ぐらいはありました。) に通されると、滞在日数を聞かれます。「15日」と「50日」がありましたので、「15日」を選ぶと、ビザ申請手数料として、1人10ドルか10ユーロを支払います。現時点ではドルの方が割安ということになります。手数料を支払うと、入国審査官が数分審査した後、ビザを発給してくれるとともに入国審査も終了となり、晴れて入国となります。

### (2) 両替

イヴァト空港に夜遅く到着したためか、入国口から駐車場まで両替カウンターを見かけませんでした。幸い、ホテルでユーロとアリアリの両替はできましたが、日本円とアリアリの両替は受け付けていませんでした。

ただ、アンタナナリヴやアンツィラナナ (Antsiranana) の街中に設置されているクレジットカード会社提携ATMで、アリアリがキャッシュアウトでき、手数料もATM利用料が110円かつ為替レートの上乗せ率もそれほど大きくはないので、都市を起点に動かれる場合はユーロやドルが必要にならないかもしれません (編集部注: 停電が頻発するマダガスカルでは機械の故障、もしくはATMがあっ



ても現金が補充されていないこともありますので、安全のため最低限の現金等を用意しておくことをお勧めします)。

### (3) 感染症対策

マラリアには注意を払い、事前に予防薬マラロンを滞在期間プラス前後3日分処方してもらい服用しました。今は、オンライン診療で海外渡航者用にネットで医師の診断を受けた後に医薬品が宅配便で送られてくるので、日本の大都市等の専門病院を見つける必要は少なさそうです。また、破傷風のワクチンも念のために近くのクリニックで受けました。

各ホテルにはベッドの天蓋型の蚊帳が設置されていましたが、自然の中にあるロッジでは蚊の侵入を完全には食い止められません。後述のベレンティ (Berenty) 私設保護区内のロッジは樹々に囲まれていたためか、蚊帳の中にまで十匹以上の蚊がいて、虫除けスプレーを塗布して寝ても刺されました。

ただ、マラロンの薬効か、蚊に刺されても幸いマラリアにはなりませんでした。

### (4) 食事

探鳥のための長時間移動が前提でしたので、下痢をしないように気を付けました。生魚を避け、水はペットボトル入りミネラルウォーターだけを飲むようにしました。屋台の料理は魅力的でしたが、今回は、大事をとってホテルや観光施設内で飲み、食事をとるようにしました。

フランス料理と現地の食材が融合したシンプルな料理はいずれも美味でした。食事の度にフランスパンが山盛り出されましたが、パンというよりは仙台麩に近い食感でした。

## 2 探鳥記録 北部

イヴァト空港から双発プロペラ機に揺られて約1時間40分、アンツィラナナまで行き、市内、アンバー山国立公園 (Amber Mountain National Park)、アンカラナ特別保護区 (Ankarana Special Reserve) 及びレッドツィンギー (Red Tsingy) を探鳥しました。

### (1) アンツィラナナ

空港を降り立つと、青い空、降り注ぐ陽光、穏やかに頬を撫でる潮風、満開のブーゲンビリアが迎えてくれました。街を抜けて、アンツィラナナ大学 (The University of Antsiranana) 近くの海に見える高台のロッジに泊りました。バルコニーから見える樹々には、色鮮やかなマダガスカルハチクイ (Madagascar (Olive) Bee-Eater, *Merops superciliosus*) が止まり、美しい声でさえずっていました。ヨーロッパイエスズメ (House Sparrow, *Passer domesticus*) が、庭の雑草や地面で餌をついばんでいました。この周辺では、“マダガスカルの雀”ベニノジコ (Madagascar Red Fody, *Foudia madagascariensis*) がおらず、ヨーロッパイエスズメの勢力が強いようでした。

なお、ヨーロッパイエスズメは、マダガスカル島ではアンツィラナナと東部のマンゲリヴラ (Mangerivola) あたりにしか分布しておらず、コモロ諸島 (Comores)、レユニオン (Réunion)、モーリシャス (Mauritius) 等周辺の島々から移入されたそうです。

このロッジの裏庭に、アンツィラナナからアンカラナ周辺の固有種であるカンムリキツネザル (Crowned Lemur, *Eulemur coronatus*) が住み着いていて、雌2匹を間近で観察できました。ロッジの

人がバナナをあげると美味しそうに頬張っており、“禁断”の餌付け写真を撮ることができました。

## (2) アンバー山国立公園 (Amber Mountain National Park)

鳥とカメレオンに詳しいシェイル (Sheilo) さんの案内で探鳥しました。シェイルさんは、教師をしていたそうですが、大学で観光学を学び直してガイドに転職したそうです。私たちが、場所を指差してもらっているにもかかわらず、なかなか見つけられない傍らで、カメレオンを次々と見つけていました。

南の島感漂うアンツィラナナから車で1時間ほど走ると、公園の敷地内に入りました。標高が高いせいか、気温も低く湿気に包まれた森に、カメレオンが多数いました。大型のウスタレカメレオン (Oustalet's Chameleon, *Furcifer oustaleti*) から約3センチメートルのミニマヒメカメレオン (*Brookesia minima*) まで数種類のカメレオンを観察しました。ミニマヒメカメレオンは樹木の根付近の枯れ葉の中にいるので、根元付近は歩かないよう、シェイルさんから注意を受けました。

公園の探鳥中、断続的に降っていた柔らかい雨が止んだ瞬間、科をまたいだ混群がやってきました。以下の鳥たちが、高さ約5メートルの樹の上から3分の1の辺りで盛んに採餌し、終わるとまた群で去っていきました。

- ・マダガスカルサンコウチョウ (Madagascar Paradise-Flycatcher, *Terpsiphone mutata*)
- ・ニュートンヒタキ (Common Newtonia, *Newtonia brunneicauda*)
- ・マダガスカルタイヨウチョウ (Madagascar Sunbird, *Cinnyris notatus*)
- ・マダガスカルメジロ (Madagascar White-eye, *Zosterops maderaspatanus*)
- ・マダガスカルハタオリ (Nelicourvi Weaver, *Ploceus nelicourvi*)
- ・マダガスカルオウチュウ (Madagascar Drongo, *Dicrurus forficatus*)
- ・クロヒヨドリ (Madagascar Bulbul, *Hypsipetes madagascariensis*)
- ・カギハシオオハシモズ (Hook-billed Vanga, *Vanga curvirostris*)

カラ類混群を見慣れているので、科も色合いも異なる多様性豊かな群れがどうして形成されるのか面白く思いました。

ここでは、イソヒヨドリ属の地域固有種である Amber Mountain Rock-Thrush (*Monticola erythronotus*) を見ることができました (図1)。



図1 Amber Mountain Rock-Thrush (*Monticola erythronotus*)

雄が、背中、肩羽、小～大雨覆、翼帯、初列～三列風切、腰までが赤身がかかったオリーブ色をしており、アンバー山の枯れ葉が堆積した地面になじんでいました。地上で昆虫や小型爬虫類を採餌するのに最適なのではないでしょうか。マダガスカル以外の地域でも見られるモリカワリツグミ (Forest Rock-Thrush, *Monticola sharpei*) と上記の部分の色と足の長さ以外はほぼ同じであり、遺伝子的にもそれほど大きな違いはないそうです。

また、マダガスカルハタオリとニシマダガスカルハタオリ (*Sakalava Weaver, Ploceus sakalava*) も、雄の頭部などの色が異なる以外はほぼ同じです (前者は雌雄ほぼ同色、後者は雌雄で色が異なります)。

ベニノジコ属にしても、後述するとおり、アンタナナリヴで見かけたベニノジコ (*Madagascar Red Fody, Foudia madagascariensis*) とトラニャロ (Tôlanaro) で見かけたマダガスカルベニノジコ (*Forest Fody, Foudia omissa*) は、前者の腹部が赤一色か灰色とのまだら模様であるのに対して、後者はアポロチョコのようにお腹の真ん中で上部は赤、下部はグレーとはっきり分かれていました。

日本では、北海道や島しょ部では、例えばエナガに対する北海道のシマエナガ、コマドリに対する伊豆諸島などのタネコマドリのような亜種を見かけるため、「亜種と言えば離島」と思っていました。そのため、マダガスカル島のように地続きの場所で、哺乳類等に比し長距離移動の容易な鳥類に地域固有種が豊富にあることは面白く感じられました。海でなくても、鳥類の地域固有種が発生するのは、地続きに見えても実は何らかの地理的な隔離が生じているからでしょうか。

上記以外にアンバー山国立公園で観察できた鳥類：

- ・アフリカバンケン (*Madagascar Coucal, Centropus toulou*)
- ・マダガスカルカワセミ (*Madagascar Kingfisher, Alcedo vintsioides*)
- ・マダガスカルセキレイ (*Madagascar Wagtail, Motacilla flaviventris*)
- ・マダガスカルシキチョウ (*Madagascar Magpie-Robin, Copsychus albospecularis*)
- ・ルリイロオオハシモズ (*Blue Vanga, Cyanolanius madagascarinus*)



観察できたキツネザル：

- ・カンムリキツネザル
- ・サンフォードキツネザル (Sanford's Lemur, *Eulemur sanfordi*)

### (3) アンカラナ特別保護区

近くのアンカラナロッジに宿泊しましたが、暗いうちから様々な鳥の鳴き声がこだまする中、太陽の光が差し込み、敷地内の美しい花をつけた樹にマダガスカルヤツガシラ (Madagascar Hoopoe, *Upupa marginata*) が止まる姿は、この世のものとも思えない美しさでした。

アンカラナ特別保護区の入口で受付をした後、保護区内に入りました。乾季で涸れた川の底を歩き、洞窟の入口を超えて、ツィンギが一望できる展望台までをシェイルさんの案内で歩きました。

観察できた鳥：

- ・カンムリジカッコウ (Crested Coua, *Coua cristata*)
- ・ルリイロオオハシモズ
- ・マダガスカルコノハズク (Malagasy Scops-Owl, *Otus rutilus*)
- ・シキチョウ
- ・マダガスカルオウチュウ

観察できたキツネザル：

- ・アンカラナイタチキツネザル (Ankarana Sportive Lemur, *Lepilemur ankaranensis*)

## 3 探鳥記録 アンタナナリヴ

### (1) ツアラソチャ公園 (Tsarasaotra Park)

アンタナナリヴの中心地にあるアラルビア湖 (Lac Alarobia) を囲む都市型公園です。カモ好きの私には、岸を埋め尽くすカモの大群が見えて幸せでした。サギも多数、営巣していました。

- ・ダイサギ (Great Egret, *Ardea alba*)
- ・クロコサギ (Black Egret, *Egretta ardesiaca*)
- ・アマサギ (Cattle Egret, *Bubulcus ibis*)
- ・カンムリサギ (Squacco Heron, *Ardeola ralloides*)
- ・マダガスカルカンムリサギ (Malagasy Heron, *Ardeola humbloti*)
- ・ササゴイ (Striated Heron, *Butorides striata*)
- ・ゴイサギ (Black-crowned Night-Heron, *Nycticorax nycticorax*)
- ・コサギ (Little Egret, *Egretta garzetta*)
- ・アカリュウキュウガモ (Fulvous Whistling-Duck, *Dendrocygna bicolor*)
- ・シロガオリュウキュウガモ (White-faced Whistling-Duck, *Dendrocygna viduata*)
- ・アカハシオナガガモ (Red-billed Teal, *Anas erythrorhyncha*)
- ・マダガスカルガモ (Meller's Duck, *Anas melleri*)

- ・マダガスカルヤツガシラ
- ・インドハッカ (Common Myna, *Acridotheres tristis*)

## (2) タナ・ウォーターフロント (Tana Waterfront)

朝方、ショッピングモールの前の小さな池に多数のサギ科の鳥が集まっていました。昼前には1, 2羽を残していなくなってしまったので、朝の採餌ポイントのようです。ツアラソチャ湖より観察条件がよく、アマチュアバーダーのアノマリー「鳥はなんちゃんないところにいる。」を再確認しました。

- ・ダイサギ
- ・クロコサギ
- ・アマサギ
- ・マダガスカルクロサギ
- ・カンムリサギ
- ・ササゴイ
- ・ゴイサギ
- ・マダガスカルアシナガヨシキリ (Madagascar Swamp-Warbler, *Acrocephalus newtoni*)
- ・ベニノジコ

## 4 探鳥記録 南部

イヴァト空港から双発プロペラ機で約2時間、赤土の大地、崩落する崖、所々たなびく煙を眼下に見下ろしながら、トラニャロに到着しました。こちらも南国リゾートムードが漂っていました。

### (1) トラニャロ (Tôlanaro)

ホテル Croix de Sud の庭に、マダガスカルベニノジコが止まり、至る所でインドハッカが盛んにさえずっていました。高い木のでっぺんには、マダガスカルチョウゲンボウ (Madagascar Kestrel, *Falco newtoni*) が止まって辺りを睥睨し、時々獲物を見つけて急降下していました。ホテル脇の大木には、キバシトビ (Yellow-billed Kite, *Milvus aegyptius*) が止まり (図2)、朝日を浴びながら羽繕いをしていました。

トラニャロでは、長年そこに住んでいる横山さんにお会いして、現地の様子をおうかがいすることができました。ベレンティ私設保護区までの道のりがEUの援助で整備中であることも知りました。また、トラニャロ滞在中、午前3時頃に地震がありました。震度2か3ぐらいでしたが、高台ではあるものの海に近いところに滞在していたので、少し怖く感じました。



図2 キバシトビ (Yellow-billed Kite, *Milvus aegyptius*)

## (2) ベレンティ私設保護区

トラニャロからは、日本語を含む多言語を操るオリビエ (Olivier) さんにガイドをお願いしました。鳥、カメレオン、植物に止まらず、各分野にわたる豊富な知識に驚かされてばかりでした。

トラニャロの市街地から混雑するでこぼこ道をピックアップトラックで進み、郊外に抜けてしばらくすると、横山さんから聞いたとおり、砂利で舗装された道が続き、至る所で道路工事中でした。マダガスカル滞在中唯一覚えたマダガスカル語「Mora Mora」(ゆっくり) が、交通誘導者の掲げるボードに愛嬌たっぷりに書かれていました。

道中、棚田が広がり、サギ科の鳥たちを見かけました。アンドウハヘラ (Andohahela) 国立公園を右手に見ながら進み峠を越えると、それまでの蒼々とした熱帯雨林から半砂漠有刺林にガラッと変わりました。亜竜木 (*Alluaudia procera*) の林に、一瞬バオバブかと思った *Pachypodium mikea* が点在し、サイザルアサ (*Agave sisalana*) の花の茎部分のみが、2メートルを超えてひょろっと伸び、心もとなげに風に吹かれていました。地面に這いつくばるように茂る葉とは対照的で、これが同一の植物とは思えませんでした。オリビエさんによれば、サイザルアサはメキシコ産の外来種で、そのあたりはベレンティ私設保護区のまわりを囲うように原生林を切り拓いて商品作物を植えたプランテーション、とのことでした。プランテーションの片隅にわずかに残された森がベレンティ私設保護区とは皮肉なものと思いましたが、鳥類やキツネザル類が保護区内の本来の生活環境で生き生きとしている様子を見ると、そうした複雑な気持ちも薄らいでいきました。

ベレンティでは、キツネザル類は主に3種、ワオキツネザル (Ring-tailed Lemur, *Lemur catta*。図3)、ヴェローシファカ (Verreaux's Sifaka, *Propithecus verreauxi*。図4)、アカビタイキツネザル (Red-fronted Brown Lemur, *Eulemur rufifrons*。図5) が保護区内を自由に闊歩し、繁殖しています。9月は、お母さ



んにおんぶされた小さな赤ちゃんをいたるところで見ることができました。



図3 ワオキツネザル (Ring-tailed Lemur, *Lemur catta*)



図4 ヴェローシファカ (Verreaux's Sifaka, *Propithecus verreauxi*) の白化個体



図5 アカビタイキツネザル (Red-fronted Brown Lemur, *Eulemur rufifrons*)

また、鳥たちもつがい仲睦まじく営巣を始めた時期にあたり、雌雄をそろってみることができました。特にカルカヤインコ (Grey-headed Lovebird, *Agapornis canus*) の雌雄が仲良く羽繕いをする様子は、Lovebirdの言葉にぴったりでした。

上記以外の観察できた鳥：

- ・キバシトビ
- ・マダガスカルチョウゲンボウ
- ・マダガスカルキジバト (Madagascar Turtle-Dove, *Streptopelia picturata*)
- ・マダガスカルアオバト (Madagascar Green-Pigeon, *Treron australis*)
- ・シッポウバト (Namaqua Dove, *Oena capensis*)
- ・クロインコ (Vasa Parrot, *Coracopsis vasa*)
- ・コクロインコ (Black Parrot, *Coracopsis nigra*)
- ・オニジカッコウ (Giant Coua, *Coua gigas*)
- ・ハシリジカッコウ (Running Coua, *Coua cursor*)
- ・カンムリジカッコウ
- ・マダガスカルアオバズク (White-Browed Hawk-Owl, *Ninox superciliaris*)
- ・マダガスカルヨタカ (Madagascar Nightjar, *Caprimulgus madagascariensis*)
- ・マダガスカルハチクイ
- ・マダガスカルヤツガシラ
- ・クロヒヨドリ

- ・カギハシオオハシモズ
- ・マダガスカルシキチヨウ
- ・ニュートンヒタキ
- ・マダガスカルサンコウチヨウ
- ・マダガスカルタイヨウチヨウ
- ・ニシマダガスカルハタオリ
- ・インドハッカ
- ・マダガスカルオウチュウ
- ・ムナジロガラス (Pied Crow, *Corvus albus*)

上記以外の観察できたキツネザル：

- ・ハイイロネズミキツネザル (Gray Mouse Lemur, *Microcebus murinus*)
- ・セアカネズミキツネザル (Gray-Brown Mouse Lemur, *Microcebus griseorufus*)
- ・シロアシイタチキツネザル (White-Footed Sportive Lemur, *Lepilemur leucopus*)



図6 カルカヤインコ (Grey-Headed Lovebird, *Agapornis cana*)

## 5 おわりに

マダガスカルでは、固有種の多さに驚かされました。滞在中一番多く聞いた言葉は「*madagascariensis*」だったかもしれません。この種はマダガスカル島がアフリカ大陸から分離する前からいたのだろうか、それとも分離してからたまたまたどり着いた種が繁殖したものだろうか、などなど、生物種の起源などに色々と思いを馳せる旅となりました。また、マダガスカルについては、人柄の優しさ、気候の多

様性、豊富な資源、海へのアクセスの良さなど、可能性に満ちた国である、との感想を抱きました。今後もマダガスカルに注目し、関わっていきたいと考えています。

## 6 参考文献

- 山岸哲（編著）・増田智久・H.ラクトゥマナナ（著）（1997）『マダガスカル鳥類フィールドガイド』、海游舎.
- Ian Sinclair and Olivier Langrand (2014) *Oiseaux des îles de l'Océan Indien*, Delachaux et Niestlé.
- Russell A. Mittermeier, Olivier M. Langrand, Don E. Wilson, Anthony B. Rylands, Jonah Ratsimbazafy, Kim E. Reuter, Tiana Andriamanana, Edward E. Edward E. Louis Jr., Christoph Schwitzer, Wes Sechrest (2021) *Mammals of Madagascar*, Lynx Nature Books.



# 調査ノート：マダガスカル東部アンダシベ地域の様相－熱帯林と人々の暮らし

増田初希（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

## 経緯

世界的にも特殊なマダガスカルの自然と人々の暮らしに関心を持った自分は、指導教員である佐藤宏樹氏から「東部のアンダシベ（Andasibe）はどうか」と勧められた経緯から 2022 年の 10 月に初めてアンダシベに足を運ぶこととなった。人生で初めてのアフリカ、日本やこれまで訪れた海外とは全く異なる異郷の地で目に見えるものが新鮮で同時に恐ろしく感じたことを覚えている。以降、多くの人々の支援の下、アンダシベの地で手探りで研究活動を行ってきた。

本稿ではこれまでの活動の中で理解した、1.アンダシベの地域概要、2.生業と自然保護、最後に 3.アンダシベの森簡易ガイドを紹介したい。森の簡易ガイドに関しては研究者のみならず、マダガスカルへの訪問を考える皆様にもお役に立てる内容であることを目指した。

## 1. アンダシベ地域の概要

マダガスカルの首都、アンタナナリボ（Antananarivo。通称タナ）から車で約 150 km の場所にアンダシベは位置している。アンダシベはコミューン（最小の行政単位）であり、その中心はアンダシベ村、そしてアナラマザウチャ（Analamazaotra）国立公園とマンタディア（Mantadia）国立公園の面積の一部を有している。中心部のアンダシベ村にはコミューン全人口の約 46%に当たる、6,272 人が生活している（2019 年時点）。



図1 マダガスカルの全体図。赤丸がアンダシベ。

アンダシベは「大きなキャンプサイト」という意味を持つ。フランス植民地時代の地名はペリネ（Perinet）である。その時代にこの地は首都のタナと国内最大の貿易港である東海岸に位置する都市

トアマシナ（Toamasina）を結ぶ鉄道建設の拠点とされた。現在の駅の周辺に木材に加工を施す工場 CIBA が建設され、そこに労働者が集まり村が形成された経緯がある。

生業という観点ではアンダシベは栄枯盛衰を見せている。植民地時代に始まった木材の伐採と加工は、森林保護を理由に 1999 年から 2000 年の間に閉鎖された。また、同じくコミューン内にあったグラファイト工場は、グラファイト価格の低下により 2000 年に閉鎖され衰退を見せた。現在ではアンダシベ村、アンツァパナナ（Antsapanana）村を含む中心地では小売や観光業が盛んに行われ、それ以外の場所では農業を主に炭焼き、石材加工が行われている。また、ムララヌ（Morarano）地域のアンバトビー（Ambatovy）鉱山では大規模なニッケル採掘事業がおこなわれている。



図 2 木材加工場の跡地。現在はガルディヤン（守衛）一家が生活するのみ。

## 2. 生業と自然保護

このように産業が移り変わっていく中で、現在では観光業が盛んに見られる。マダガスカルの東部に位置するアンダシベはコミューン面積の約 60 パーセントが森林で、アナラマザウチャ国立公園・マントディア国立公園は国内でも 1 位 2 位を争う来訪者数（近年では南部のイサル（Isalo）国立公園が首位）を誇る。この地域には、国立公園に加え、私設保護区や住民によって管理されている森（Vondron<sup>1</sup> Olona Ifotony。以下 VOI）が存在する。後にも紹介するが、エコツーリズムに取り組んでいる森が 6 箇所は存在し、そこには宿泊施設が 22 箇所あり、年々新しいホテルやロッジが建てられている。アンダシベの観光地としての魅力としてあげられるのはマダガスカル熱帯林の生態系を有するところ、そして首都からの良好なアクセスである。首都から東部の主要都市トアマシナを繋ぐ国道 2 号線の大改修工事が 2023 年末に完了し、その道中に位置するアンダシベには首都から車で 4~5 時間でのアクセスが可能となった。

アンダシベの森では、最大の現生キツネザルであるインドリ (*Indri indri*) やシルバーとオレンジの体毛が特徴的なダイアデムシファカ (*Propithecus diadema*)、竹食のキツネザルであるハイイロジェントルキツネザル (*Hapalemur griseus*) をはじめ、パーソンカメレオン (*Calumma parsonii*)、多種多様のラン科植物など、多種にわたる熱帯林の動植物が観察できる。日中のツアーではインドリの観察を主に散策ルートが作成され、来訪者の多い森ではインドリを追跡するだけの人員が割かれているところもある。アンダシベへの来訪者は新型コロナ感染症のパンデミックで落ち込んだ後は年々増加しており、2つの国立公園を合わせた来訪者数は2023年には29,620人、2024年は40,000人近くにまで増加する見込みであるという(筆者聞き取り)。アンダシベで資格を持つガイドは100人弱ほど存在し、繁忙期の9月から11月ごろにかけては休みなく観光客を森へと案内している。ローカルガイドの資格と客を相手にするだけの言語を習得さえすれば参入できる業界であり、現金収入の一つの手段としてアンダシベの住民のみならず、23 km離れた小都市からも人が参入している。外国人を相手にするガイドは地元では高給取りで、ホテルやレストランなどの従業員の月給が200,000Ar(日本円で約6,600円)前後であるのに対して、ハイシーズンにおけるガイドは月に500,000Ar(約16,000円)以上稼ぐことも可能である。観光客をターゲットにした宿泊施設も多く存在し、一見アンダシベの人々はさぞ裕福な暮らしであるかのように錯覚する。一方でこのような所得層は人口のごく一部でしかなく、多くの人々は農業で生計を立てている。毎年12月頃になると、人々は一斉に焼畑をはじめ、煙で空気は霞み、焼けた黒い土地が顕著になる。作物を植えるための肥沃な土壌を求めて、毎年のように違法な焼畑のため保護林が焼失している。また、保護区での牛の放牧によって植物相の破壊が起きているという懸念もあり、森林の保全と住民の生活の両立が大きな課題として残っている。



図3 インドリの親子。昼間の散策ではインドリを見ることを前提にツアーが組まれる。





図4 保護区の森が燃えた数日後、パトロール員が焼け具合を確認している様子





図5 コミューンアンダシベの全体図

### 3. アンダシベの森簡易ガイド

#### ① アナラマザウチャ国立公園

国道2号線からアンダシベ村方面へ道路を入ったところに位置する。当該地域で最も多くの人を訪れる主要な場所。この地域で最も古い1970年から特別保護区となり2015年に国立公園として設立。面積810ha、散策できる周遊観察路は4種類。インドリやダイアデムシファカをはじめ、ブラウンキツネザル (*Eulemur fulvus*) やハイイロジェントルキツネザルも観察しやすいことで有名である。ハイシーズンの6月から11月にかけては観光客が集中することもある。1~4人までは均一のガイド料で散策できる (+入園料45,000Ar/人)。

## ② マンタディア国立公園

アンダシベ村から車で約 90 分、悪路を進んだ先に位置する 15,480ha の一次林。アクセスが非常に悪く、4 輪駆動の車が必須である。100 アリアリ札の絵柄となっているバロンアデガエル (*Mantella baroni*) や、ベンケイソウ科のカラコエの仲間 (*Kalanchoe spp.*)、クロシロエリマキキツネザル (*Varecia variegata*) などが観察できる。チケットは前日までに国立公園事務所にて事前購入が必要。1~4 人までは均一のガイド料で散策できる (最も主要な周遊観察路のガイド料 100,000Ar+入園料 45,000Ar/人)。

## ③ VOI MMA

アンダシベ村から最も近く、駅から 900 m の場所にある。面積は約 38 ha とこじんまりしており、住民団体によって管理されている。森林内は平坦で歩きやすく、インドリの追跡要員もいるため、観察が容易である。ブラウンキツネザルの餌付けもしており、人慣れ個体が近くまで接近することがある。1~3 時間の軽めの散策を希望の人にはおすすめ。夜間の散策もあり、森の中で生き物を観察できる (ライトの持参が必須)。

## ④ Mitsinjo

アナラマザウチャ国立公園の反対側に位置する 1,772 ha の森で住民団体によって管理されている。散策時間が 1~5 時間の多様なウォークが存在する。インドリの追跡が行われており、比較的容易に観察できる。運が良ければ新芽を食べに近くに降りてくることもある。森の中は急勾配があり。夜間のウォークも提供しているほか、森の散策だけでなく、植林体験やマダガスカルで唯一のカエルの繁殖施設の見学も可能。

## ⑤ GERP Maromizaha

国道 2 号線を東側に 10 km ほどの場所にある。面積 1,880 ha の広大なエリアは地元の 3 つの VOI とそれを束ねて管理するマダガスカルの団体 GERP (Groupe d' étude et de recherche sur les primates de Madagascar) によって運営されている。周遊観察路は 4 つほど存在し、どれも 2 時間以上を要する長いもの。勾配も多く、森の中心部にたどり着くまでに長時間 (もしくは車での移動) を要するが、場所によっては一次林に近い森が残っており、クロシロエリマキキツネザルやガルスカメレオン (*Calumma gallus*) も観察できる。

## ⑥ VOI IAROKA

住民団体によって管理されている 3,300 ha の広大な森林。アンダシベ村から国号 2 号線を西側に進み、酷道に入ること合計 10 数 km で、受付のあるタヴルベ (Tavolobe) 村に辿り着く。アクセスには車が必須であるが、12 月中旬以降、雨季になると橋の倒壊や道のぬかるみによりアクセスが不安定になる。半日以上の時間を要する周遊観察路で、急勾配や未舗装のルートも多いため、事前の準備が必要となる。インドリやダイアデムシファカは人慣れしておらず、観察には時間と労力を要するが、他の森よりも体が大きく立派な個体が観察できる。稀にヘルメットオオハシモズ (*Euryceros prevostii*) の目撃例がある。

⑦ Vohimana

アンダシベ村から国道2号線を東に16 km、アンバヴァニアシ (Ambavaniasy) 村から小さな道に入り、最後は徒歩でたどり着く。フランスの団体が管理している1,800 haの森がヴヒマナ (vohimana) である。Iaroka や Maromizaha などと同様に、森林に入るまでの距離が長く、時間の要する周遊観察路のみであるが、マンテラカエル、40 cmを超える巨大なパーソンカメレオンなど、この地で観察できる動物種の幅が広い。夜の散策も可能である。

参考文献

Ministere de L'Interieur et de la Decentralisation Region Alaotra Mangoro District Moramanga Commune Rurale Andasibe (2019) *Plan Communal de Developpement de la Commune Rurale d'ANDASIBE*.

## マダガスカル研究懇談会会則

1999年 4月 3日制定  
2002年 3月30日改訂  
2005年 4月 2日改訂  
2008年 3月29日改訂  
2009年 3月28日改訂  
2016年 5月 1日改訂  
2019年 3月30日改訂  
2021年 3月27日改訂

### 第一章 総則

(名称)

第1条 本会はマダガスカル研究懇談会（英名：Japan Society for Madagascar Studies、マダガスカル名：Fikambanana Japoney ho an'ny Fikarohana ny momba an'i Madagasikara Madagasikara）と称する。

(目的)

第2条 本会は、マダガスカル島及びその周辺島嶼の自然・社会・文化に関する会員相互の情報交換及び交流を促進し、もってこれらに関する研究の発展に資することを目的とする。

(事業)

第3条 本会は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- 一 懇談会大会の開催
- 二 電子版による情報の発信
- 三 前二号に掲げる事業のほか、前条の目的を達成するために必要な事業

### 第二章 会員

(入会)

第4条 本会に入会しようとする者は、本会が別に定める方法により、入会を申し込むものと



する。

(会員の権利)

第5条 会員は次の権利を有する。

- 一 第14条の総会への出席
- 二 第3条第二号の電子版情報への投稿
- 三 本会の事業活動への参画

(会費)

第6条 本会の会費は、無料とする。

(退会等)

第7条 本会を退会しようとする者は、事務局（第13条に規定する事務局をいう）に対して退会を申し出るものとする。

2 世話役代表（第9条第一号の世話役代表をいう）は、世話役会の決議を経て、次の各号に掲げる会員を強制的に退会させることができる。

- 一 第2条に規定する本会の目的に著しく反する行為を行った会員
- 二 本会の活動を妨げる行為を行った会員
- 三 本会の品位を損なう等の言動又は行為を行った会員

### 第三章 役員及び事務局

(役員)

第8条 本会に次の役員を置く

- 一 世話役代表世話役代表 1名
- 二 世話役世話役 10名以下
- 三 会計監事 2名

(役員の仕事)

第9条 世話役代表は本会を代表し、会務を総括する。

2 世話役は、本会の庶務、会計、渉外、及び第3条各号に掲げる事業の運営を担当する。

3 会計監事は、本会の財産の状況を監査し、その結果を総会に報告する。

(役員を選任)

第10条 役員は、会員のうちから総会で選任する。

2 世話役代表及び会計監事は、役員の間選によってこれを選任する。

(役員の仕事)

第11条 役員の仕事は2年とし、再任を妨げない。ただし、世話役代表の仕事は連続2期を限度とする。

(世話役会)

第12条 世話役会は、世話役をもって構成し、世話役代表がこれを招集する。

2 世話役会は、次に掲げる事項を決議する。

一 収支決算案及び事業報告案

二 収支予算案及び事業計画案

三 会則の制定、変更又は廃止に関する案

四 役員の仕事満了等に伴う次期役員候補の選出

五 前各号に掲げるもののほか、本会の運営に関する重要な事項として世話役会が総会に上程することとした事項

六 本会の運営の実務に関する細則の制定、変更又は廃止

七 事務局(第13条に規定する事務局をいう)の場所の選定及び事務局員第13条第2項に規定する事務局員をいう)の選任

八 前二号に掲げるもののほか、本会の運営に関する事項であって、総会の決議を要さない事項

3 世話役会の議事は、出席した世話役の過半数で決する。

4 世話役代表は、第2項に掲げる事項の全部又は一部を決議する必要がある、第1項の世話役会を招集することが困難である場合には、世話役全員に宛てた電子メールその他の通信手段を利用して世話役全員による協議を行い、その過程において世話役全員の過半数が同意の意思表示をした案をもって、当該事項を決定することができる。

5 前項の決定があったときは、当該事項についての提案を可決する旨の世話役会の決議があったものとみなす。

(事務局)

第13条 本会に、世話役代表及び世話役の会務を補佐する機関として事務局を置き、その場所は、世話役会の決議を経て、世話役代表がこれを定める。その場所を変更する場合も同様とする。

2 事務局に事務局員を置き、世話役会の決議を経て、世話役代表がこれを任命する。

3 世話役代表は、第15条第2項の規定により第3条第一号の懇談会大会その他の催事の開催にあたり参加費を徴収することとし、かつ前項の事務局員が当該催事に参加する場合には、世話役会の決議を経て、その参加費を免除することができる。

## 第四章 総会

(総会)

第14条 総会は、会員をもって構成し、毎年1回、新会計年度開始以後4か月以内に、世話役代表がこれを招集する。

2 総会は、次に掲げる事項を決議する。

一 収支決算及び事業報告

二 収支予算及び事業計画

三 会則の制定、変更又は廃止

四 役員を選任

五 その他本会の運営に関する重要な事項として世話役会が上程した事項

3 総会の議事は、出席会員の過半数で決する。

## 第五章 会計

(経費)

第15条 本会の経費は、寄付金その他の収入をもってこれに充てる。

2 本会は、第3条第一号の懇談会大会又はその他の催事を開催するにあたっては、その都度、世話役会の決議を経て、参加者から参加費を徴収することができる。ただし、第14条に規定する総会のみ出席する会員からは参加費を徴収しない。

3 前項の規定により参加費を徴収する場合には、世話役代表は、当該催事の開催及び参加費の額を予め会員に通知するものとする。

4 本会は、第3条各号に掲げる事業の実施にあたり、寄付金を募ることができる。

(会計年度)

第16条 本会の会計年度は、毎年1月1日からその年の12月31日までとする。

附則 (2019年3月30日)

この会則は2020年1月1日から効力を発する。

附則 (2021年3月27日)

この会則は2021年3月27日から効力を発する。



# 第 28 回懇談会（大会）のご案内

マダガスカル研究懇談会第 28 回大会は、下記の要領で開催されます。

今回は試行的に京都大学での対面開催および Zoom を用いたオンライン開催を併用するハイブリッド形式で開催します。対面開催では、講演会や総会はもちろん、その後の懇親会にもご参加いただけます。オンライン開催では、遠方の方も講演会と総会に参加することができます（懇親会には参加できません）。大会参加費は対面参加およびオンライン参加の両方で無料といたします（懇親会費はお支払いください）。また、今後の懇談会大会の在り方について、参加者の皆さまにはアンケートにお答えいただく予定です。会員、非会員を問わず、ふるってご参加いただけますようご案内申し上げます。

日時：2025 年3 月29 日（土）13 時30 分～（開場13 時00 分）

対面開催の場所：京都大学稲盛財団記念館 3 階大会議室

〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達町 46

URL: <https://www.africa.kyoto-u.ac.jp/contact/access/>

会場等の問い合わせ先：マダガスカル研究懇談会事務局：info@madacom.org

※対面参加の場合は、事前登録は不要です。

オンライン開催の場所：Zoom の URL を共有するために事前の参加申込が必要となります。大会開催前に本懇談会のウェブサイトより、オンライン開催への参加申込フォームを設定しますので、そちらから参加を申し込んでください。懇親会には参加できません。

## プログラム

13:30～ ご挨拶

13:40～ 発表 1: 城野 哲平（京都大学大学院理学研究科）

「マダガスカルのカメレオンにみられるオス間闘争様式の種間多様性」

14:50～ 発表 2: 飯田 卓（国立民族博物館グローバル現象研究部）

「マダガスカルとモーリシャスの無形文化遺産：文化はどこへ向かうのか」

16:00～ 総会

17:00～ ポスター発表（会場：京都大学稲盛財団記念館3階中会議室）

17:30～ 懇親会（会場：京都大学稲盛財団記念館3階中会議室）

大会参加費：対面およびオンラインの参加とも、今回に限り無料。会員以外の方もご参加いただけます。

懇親会参加費：3,000円

## ポスター発表：

会場ではポスター発表会も開催します。A0 縦長の大きさ（縦 119cm、横幅 84cm）ていどのスペースを割り当てますので、発表者ご自身でレイアウトと掲示および発表終了後の撤収をしてくださるようお願いいたします。なお、ポスター発表は、会員の方に限らせていただきます。

発表を希望されるかたは、2月末日までに、ポスター発表をする旨のメールを下記の2つのメールアドレスまで送り、発表者名とタイトルをお知らせください：

[info@madacom.org](mailto:info@madacom.org)

[edit@madacom.org](mailto:edit@madacom.org)

申込みが多数に達した場合には、先着順で発表をお受けしたいと思いますので、この点もあわせてご了承ください。会員のみなさまの積極的なご応募をお待ちしております。

# 原稿を募集しています

SERASERA は、会員間の交流と情報交換を目的としたニュースレターです。広く会員各位からの原稿（文章／表紙写真）を募集しています。

- ◆ SERASERA は、2020 年 2 月発行の 42 号から、紙媒体の印刷物ではなく、マダガスカル研究懇談会のホームページ（<http://www.madacom.org/news/index.html>）上で電子的に公開されています。SERASERA への投稿・寄稿をめぐるご質問等については、電子メールで編集部宛て（[edit@madacom.org](mailto:edit@madacom.org)）にお問い合わせください。

## 1. 原稿期限

毎年、原則 5 月 1 日に夏号の編集を、11 月 1 日に冬号の編集を開始します。この日までに、電子メールで編集部まで原稿をお寄せください（[edit@madacom.org](mailto:edit@madacom.org)）。ただし、文章を書きなれていない方の場合には、編集部とのあいだで通常より多くのやりとりをする場合がありますので、上記の期日より早めに原稿をお寄せください。

## 2. 原稿形式

文章原稿はマイクロソフト社のワード形式で、写真原稿は JPG 形式でお寄せください。

## 3. 写真原稿

表紙写真には、撮影者、撮影場所、撮影年（月日）および 100～300 文字の解説文章を添えてください。

## 4. 編集の手間を軽減するため、表紙写真原稿ではない一般原稿の場合には、できる限り、投稿者自身が文章原稿に写真を貼りこんで整形したワードファイルを作成し、お送りください。

## 5. 文章原稿

分量にとくに制限はありませんが、ひとつの記事の長さは、短いもので 2000 文字でいどを目安とします。掲載希望コーナーの名まえと題名、執筆者名と所属をお忘れなく。

文章は、予備知識のない人にも内容と意図が理解できるよう、できるかぎりやさしくわかりやすい表現で書いてください。マダガスカル語の語彙や地名、人名をカタカナ表記される場合には、アルファベット表記も添えてください。アルファベット表記がわからない場合は、編集部にご相談ください。生物についての学術的な原稿の場合は、生物名のラテン学名もできるだけ添えてください。

## 6. 関連写真・図表

番号と短いタイトル、必要に応じて 2～3 行以下の解説を付してください。ひとつの記事につき、写真と図表あわせて 10 点でいどを上限とします。

## 7. 記事の出典（リソース）

自分が直接見聞していない話や、自分が集めたのではない資料については、出典（リソース）を明記してください。また、未確立の学説や根拠薄弱な仮説などが引き合いに出される場合、編集部が根拠や出典などの提示を求めることがあります。引用した文献については、著者名・文献名・出版年・出版社ないし書誌名・掲載ページ（雑誌論文の場合）などを文献リストとして末尾にま

とめておいてください。

#### 8. 文章コメント

わかりやすさと最低限の正確さを期するため、編集部が文章に目をとおして、著者にコメントを連絡いたします。ただし、最終的な文責は寄稿者にありますので、編集部からのコメントに従うか従わないかを適宜判断して、手直しをおこなってください。この作業は、原則一回とします。SERASERAの発行主旨や会の活動目的に合致しない記事と編集部が判断した場合には、掲載の延期や中止をお願いする場合があります。

#### 9. レイアウトの著者校正

夏号の原稿については6月中、冬号の原稿については12月中に、レイアウトの著者校正をおこないます。この時点では、ページ数が変わるような大幅な変更ができませんので、8.に関わる手直し時まで、納得のいく文章にしあげてください。著者校正の段階で大幅な加筆訂正をされた場合には、編集部が掲載の延期や中止をお願いする場合があります。

#### 10. 刊行とウェブ公開

夏号は7月下旬、冬号は1月下旬をめどに電子的に刊行いたします。ただし、編集作業は会員のボランティア作業にもとづいておこなわれていますので、執筆者のみなさまにはその旨よろしくご理解とご協力のほどをお願いいたします。投稿された記事や画像は、マダガスカル研究懇談会のホームページで公開します。

### ニュースレター編集方針

- ・ マダガスカル研究懇談会ニュースレターは愛称を「SERASERA」とします。Seraseraはマダガスカル語で「交流」を意味し、<セラセラ>と発音します。
- ・ ニュースレターの編集は、世話役と事務局員から構成される編集部によりおこなわれます。
- ・ 編集部員の名前はニュースレター上に開示します。
- ・ ニュースレターは会員からの投稿および編集部が会員と非会員に対し執筆を依頼した原稿を記載し、発行されます。
- ・ 原稿は、会の活動目的に沿う内容とします。
- ・ その上で原稿は、その分野や領域を限定しません。
- ・ 編集部は寄せられた全ての原稿を査読し、その内容が会の活動目的に合致しているかどうか、事実関係についての誤りあるいは文章表現や表記上の誤りや不適切な箇所がないかどうかについて判断いたします。
- ・ 編集部は、執筆者に対し、原稿内容の修正を求めることができます。
- ・ 原稿のニュースレター掲載への最終的判断は、編集部に一任されます。したがって、その内容が不適切であったり、事実関係の修正がなされない場合には、編集部から依頼した原稿であっても、不採用とする場合があります。不採用の理由については、原稿の執筆者に対し編集部から通知いたします。
- ・ SERASERAに掲載された著作物の著作権はすべて著作者にあり、著作者はSERASERAに掲載された著作物を自由に利用できることとします。ただし著作者は、著作物の複製と公衆送信をマダガスカル研究懇談会に許諾したものとみなします。



## 2024 年度世話役・事務局・編集部・会計監事

【世話役】飯田卓・市野進一郎・蟹江康光・蟹江由紀・佐藤宏樹・高畑由紀夫・水田拓(世話役代表)  
・箕浦信勝・森哲・吉田彰

【事務局】大河龍之介・蒲生康重・篠村茉璃央・前畑晃也・増田初希

【編集部】市野進一郎(編集主任)・大河龍之介・篠村茉璃央・前畑晃也・水田拓

【会計監事】杉本星子・平野智巳

マダガスカル研究懇談会 ニュースレター SERASERA 第 52 号

発行者 マダガスカル研究懇談会

〒606-8511

京都府京都市左京区吉田下阿達町 46

京都大学アフリカ地域研究資料センター内

2025 年 3 月 21 日発行